

東京都の文化施策を語る会（第3回）議事要旨

- 1 日 時 平成17年5月24日（火） 午後1:30～午後3:30
- 2 場 所 トーキョーワンダーサイト
- 3 出席者 今村委員、岡本委員、柏木委員、平田委員、福原委員、太下専門委員、
大友直人ゲスト委員
- 4 次 第
 - （1）開会
 - （2）資料確認
 - （3）意見交換 [テーマ：文化事業・文化活動への支援のあり方について]
- 5 発言要旨

山本文化振興部長

ただいまより第3回東京都の文化施策を語る会を開会させていただきます。本日はお忙しいところご出席いただきまして誠にありがとうございます。

初めにゲスト委員を紹介させていただきます。指揮者で東京文化会館音楽監督の大友直人委員でございます。大友委員は、東京文化会館音楽監督のほか、東京交響楽団常任指揮者や京都市交響楽団常任指揮者兼ミュージックアドバイザー、さらには海外での数多い客演など幅広いご活躍をされております。

特に小学校高学年を主な対象といたしまして、サントリーホールで毎年開催されております『子ども定期演奏会』や、今年の8月には東京文化会館で『夏休み子ども音楽会』を開催されるなど、子どもたちからオーケストラに身近に接して、生活の中で音楽会を楽しむ活動に力を入れておられます。

それではこれより先は福原座長に進行をお願いいたします。

福原座長

後程、大友委員にお話をいただくわけですが、その前に事務局から資料の説明をお願いしたいと思います。

粉川副参事

（資料の説明）

福原座長

ありがとうございました。今日はお忙しいところ、ゲストとして大友委員をお招きし

ております。大友委員からは、音楽に関する文化振興について、特にご自身の経験を含めてご発言をいただきたいと存じます。それではよろしく願いいたします。

大友委員

ご紹介いただきました大友でございます。

私は、昨年の7月から東京文化会館の音楽監督として主に文化会館の企画に携わっております。本来の仕事はオーケストラの指揮でございます。ふだんの活動はステージの公演がほとんどでございます。今日は、私が日ごろ感じていること、それに伴って、いま活動していることを簡単にお話しいたします。

皆様もご承知のように、東京は世界で最も多くのクラシック演奏会が開催されています。1980年代以降は、たとえばニューヨーク、パリ、ロンドン、ベルリン、ウィーンとか、音楽の都はたくさんありますが、それらと比較しても圧倒的にコンサートの数、内容、顔ぶれなど、東京は頭一つ抜けているほどの質と量の音楽会が開催されている。これは言い方を変えますと、世界最大の音楽マーケットになっている。

オーケストラの世界も、東京だけで100人規模のプロフェッショナルのオーケストラが8つございます。コンサートホールも、60年代の東京文化会館を皮切りに、新しい多くのコンサートホールができてまいりまして、これに室内楽とかソロのリサイタルを含めると大変活発な音楽活動が行われているという現状がございます。

その一方で、それぞれのオーケストラを恒常的に支援する定期会員やメンバーをどれだけ獲得しているかという視点では、恐ろしいほど数が少ない。私でも、今晚幾つの演奏会が開かれているのかわからないほどの演奏会があり、相当数のお客様にお越しいただいておりますが、この方たちが、意識的にアーティストやオーケストラといった文化団体をサポートしている人口は少ないと思います。ですから、イベントとしての演奏会に参加して、もう一步踏み込んで、一般の家庭あるいは一人ひとりの生活と文化とのかかわりというあたりの深い繋がりが少し希薄なのかなと思います。

これだけ豊かな生活を享受する国になってきたわけですし、特に東京は、いま申し上げた意味でも質・量的に大変豊かなのですから、本当の意味で一人ひとりの個人のプライベートな生活の中でも豊かな生活を実現していくことはとても大事なことだと思います。そして、そういうことは、私は本来であれば家庭の中から自然発生的に生まれてくるものだろうと思っています。

私は昭和33年生まれですが、私が学校で受けた教育では、音楽や美術を勉強するとか、あるいはスポーツをやるということは、少なくとも私が通っていた学校ではそれほど重要なことではありませんでした。学校生活では主要3教科、5教科が一番大事な科目であって、音楽や美術、体育は、乱暴な言い方かもしれませんが、いわばどうでもいい科目だと。それがおそらく戦後の日本の教育の中では、どこの地域でもそのような方向性があったのではないかと思います。

戦後60年もそういう教育を受けてきた人たちで構成されている国ですから、音楽や美術の話をして、『私はどうもそのへんは苦手』とか、『詳しくないので』とか、まずそういうリアクションをなさる方が非常に多いわけですね。これはある意味ではとても残念なことだと思います。そういう認識を子どもころから少しずつ変えていくことに、そろそろこの国も真剣に取り組んでいかなければいけないのではないかと。

特に東京と言えば、何もかも東京一極集中なのかなと思うほど、圧倒的なパワーを持っています。であれば、その東京が持つべき責任といいますか、東京が示さなければいけないリーダーシップはたくさんあると思います。殊に、東京文化会館のことで申し上げますと、私が音楽を好きになって演奏会に通い始めた60年代のころは、東京文化会館に音楽会を聴きに行くことは本当に胸躍るようなすばらしい体験、思い出、期待の連続だったわけです。そのころ聴いた一回一回の演奏会が、昨日のことに鮮やかに思い出されるわけですが、その東京文化会館も、サントリーホールをはじめいろいろな新しいホールが出てきて、幾分色あせている状況はあると思います。

そして今、私は東京文化会館でいろいろな企画を担当する責務を負ったわけですが、正直申し上げますと、民間のホールなどは自主企画にも相当力を入れ、えり抜きのスタッフを集め、企画室を擁し趣向を凝らしています。民間との競争に入った時代に、東京文化会館がリーダーシップをとることを考えなければいけないとつくづく思っております。そのためには、もう少し強力な音楽スタッフを擁していただけたらという思いもないことはないのですが、いずれにしても、かつて60年代、70年代に文化会館がとっていたようなリーダーシップや、音楽を愛好する人々にとってのあこがれのホールであり続けなければいけないと思います。

東京文化会館でも、子どものための企画を行います。以前から私の常任をしているオーケストラで、家庭の中から自然に音楽会を楽しむことを目的に、4年ほど前にス

スタートさせた『子どものための定期演奏会』というシリーズがございます。これは夏休みなどに単発に行われるイベント的な子ども向けコンサートと一線を画しまして、年間を通してのいわゆる定期演奏会、大人が聴く定期演奏会と同じような意味づけのタイトルで、そのオーケストラのメンバーになっていただいて、連続して演奏会を聴いていただこう。それも1年ということではなしに、できれば何年もずっと継続的にオーケストラとホールに通ってきてもらって、オーケストラや音楽が生活の中にあることを体験してもらうために企画しました。

これは予想を超える反響がございまして、サントリーホールと京都コンサートホールでは全部の公演が連続券で売り切れております。したがって、そういうものを望んでいるご家庭がこんなに多いのかということがまず一つの驚きでした。企画をによっては、そういうニーズが潜在的にあるということを私自身が認識した次第でございます。

最近、東京都が後ろ盾になって、ただの鑑賞型ではない子どもたちのアプローチをずいぶん積極的にお考えになっているようです。そのときに大事なことは、NHKで放送されている『課外授業 - ようこそ先輩 - 』のように、本当にその世界の第一線で活躍し、力を振り絞って毎日必死でやっているアーティストを、なるべく若い子どもたちと直に接点を持たせていくことは非常に意味のあることだと思います。子どもたちにとって出会うものは、精いっぱい最高のものであるということが一番大事です。そのときの質の問題、これにはなるべくこだわっていただきたい。

もう一つ、東京は、先ほど申し上げたように大変な国際都市ですから、東京の文化活動が海外に対してどういうインパクトを持っているかを真剣に考えたい。私の個人的体験でこういうことがありました。私は、N響に学生入団し指揮研究員をやっておりました。当時からN響には世界の一流の指揮者が毎月のように見えていた。例を挙げますと、ヴォルフガング・サバリッシュさんなどというマエストロが、毎年日本に滞在してN響の名誉指揮者として活躍していました。ところが、私が高校を卒業し、世界中の音楽学校を回って旅行をしたのですが、ショックだったのは、日本で大変おなじみのアーティストの演奏会での彼らのプロフィールの中に、日本とかNHK交響楽団とかが出て来ない。アーティストによっては何も書いてない。サバリッシュさんなどは、「彼の活動は遠く極東にも及んでいる」というような文章が1行書いてある。

その当時、日本は世界でも屈指の音楽マーケットにもかかわらず、海外でのプロフィ

ールでは無視されるポジションだということを、私はそのとき初めて知りました。やはり世界の中での文化活動をもっと積極的にアピールして、活動自体のステイタスを上げていく必要があるだろう。そういうことを考えました。

でも、実は、いま申し上げた状況は現在でも大して変わりはないというのが私の認識です。ウィーンフィルもベルリンフィルも毎年のように日本に参ります。超一流の演奏家で、年に2回も3回も日本に来る人もいます。でも、この人たち、個人差はありますが、やはり日本はいい出稼ぎ場所でしかなくて、自分たちの本当のキャリアとはあまり密接に関係していないのが実態だと思います。

このようなことを変えていくために、本当は若いアーティストや学生、そういった年代の人たちとの国際交流によって、どんどん東京に来てもらって、東京の活力ある活動を本当に目の当たりにしてもらい、日本の若いアーティストたちとの交流を深めてもらいたい。そういう人たちが将来、プロフェッショナルになり、あるいはあらゆる社会の場で活躍したときに、日本はこういう国だよ、こういうことができるんだよという認識を持った人たちが社会を支えていく時代になってきた時に、少しずつ、いま申し上げた認識が変えられるのかなということを思っています。

ですから、若い人たちの国際交流に関する支援は東京都がリーダーシップをとって、ぜひやっていただきたいと思う次第です。

福原座長

ありがとうございました。いまの大友さんのお話について、皆様からのご意見、ご質問がありましたら、ぜひ続けてお願いいたします。

平田委員

私自身、いま埼玉県の高見市で芸術監督をやっていて、昨年度、地元6校の中学校のうち4校に授業に行きました。そうすると、非常に先生方の理解も深まり、ワークショップの依頼などが次々と来るようになりました。演劇には専門の教員がいないので、小中学校で総合学習の時間に演劇をやりたいといってもできないし、どうやっていいかわからないという声がある。これは、採算ベースには合わないので行政の手助けが欲しいところです。

もう一つ、海外から若手のアーティストを招いて、一緒に仕事をして作品をつくるなどして、その作品が彼らの出世作になりキャリアになるようにバックアップすると、

将来的にその波及効果は非常に大きいと思います。来年からアヴィニヨンの副芸術監督になるフレデリックという私の友人は、30歳前後で日本に来て、私と一緒に仕事をしました。彼はフランスでは、日本演劇に関して非常に知識があるとされ、日本演劇がアヴィニヨンに行きやすくなっているわけです。

できれば20代あるいは30代前半ぐらいで共同作業をさせる。若いうちは友情だけで作品をつくれますから、意外なほど安くて済むので、ぜひそこに投資をして欲しい。東京は物価が高いので、特に外国人がすぐに住めるようなアパートはないのでレジデンス面のサポートは、意外なほどに大きな成果が上げられるはずです。

今村委員

若手の交流について、私から一言お話をさせていただきます。

ワンダーサイトでは、今年度様々な若手の国際交流プログラムを組んでおります。

まず7月にオープンする「トーキョーワンダーサイト渋谷」では、社会活動とアートを結びつけたアメリカのアーティストを紹介します。8月には韓国と日本を相互交流し共同で展覧会を開催します。

9月には、スイスにいる中国系の女性を東京に招いて、東京のビデオアーティストグループと共同でビデオアートの作品をつくります。10月は、ベルリンの多文化的な側面を支えている文化拠点であるクンストラウム・クロイツベルグ・ベターニエンと協力して、ストリートカルチャーの日米のアートの交流を、若手でやります。11月、12月は、イギリスの若手アーティストのRCAというグループが東京へやって来て、展覧会や共同制作もやる予定です。ワンダーサイトという小さいスペースですが、そのようなことを積極的にやっていこうと思っています。

音楽の面でもアンサンブル・モデルンという、ヨーロッパで現代音楽の一流のアンサンブルが、今年の7月にこちらへ来ます。作曲家と演奏家のワークショップを1週間やって、最終日に東京文化会館でコンサートをやりますが、レッスンに出た日本人の若手とアンサンブル・モデルンとの一緒にステージを企画しています。

つい先日、オーストラリア政府に招かれまして、ぜひオーストラリアの現状を見てほしい、若手の交流のハブになってもらえないかということで尋ねて行ってみました。彼らが僕に言ってきたのは、オーストラリア政府はあるいは州政府は、アーティストを東京に送りたい。でも、東京は受け入れ機関がない、どこへ話したらいいんだと。

実はワンダーサイトはやりたいという話をしたら、それはぜひやってくれと。公共のところで受け入れがあり、ネットワークをつくるのが非常に重要だと思っています。

アジア諸国とも、いまおつき合いを始めています。アジアの諸国の中で自由にレジデンスや共同制作ができる、そういうネットワークをつくるため、7月に台北でアジア・ヨーロッパ・オセアニアの受け入れ機関の人たちが集まって情報交換をして、どこどこがどういうふうに手を握れるだろうかというのをやります。これは昨年、上海で行われたのですが、それに僕も行ってきました。そういうことが起こっていますので、もうちょっと大きな視点から国際交流、特に多文化の時代に入っている中で、非常に重要な草の根の交流になり、その関係性が年とともに太いものになっていくと思っております。

福原座長

ありがとうございました。

では本題に戻りまして、特に今日は舞台芸術を中心にして、文化事業・文化活動への支援としてどのような取り組みを進めて行ったらよいかというようなことについてご意見をちょうだいしたいと思います。

平田委員

やはり東京が、日本の文化政策、あるいは海外との外交文化政策の窓口になるべきですが、それが機能していないところに大きな問題があると思います。

演劇の分野で、海外からの受け入れに関して言えば、共同制作等の窓口はありません。派遣に関しても、日本のこれまでの派遣のシステムは、勉強させに行くか、伝統芸能を紹介しに行くかしかないんですね。要するに共同作業をする、あるいは日本人が現代的なものを教えに行く支援のシステムはないのです。

常々、そういったことも含めて、ヨーロッパの劇場のように劇場がきちんと劇場として機能をする、ただ単に鑑賞の場所だけではなくて、発信の場所でもあり、国際的な窓口でもあり、人材育成の場所でもあり、地域の芸術文化活動に対して、あるいは芸術文化の教育に関して責任を持つ指令塔にもなる。

東京芸術劇場に関して言うと、申しわけありませんが、その機能をほとんど果たしていないのではないかと。そこが一番問題なのではないかと思っております。

また、都民芸術フェスティバルの包括外部監査指摘のうち、料金の低廉さの重要度

が低下については、ちょっと違和感があります。演劇でさえ6千円とか8千円ですから、夫婦二人で行ったら1万2千円から1万5千円、これは子どもがいる夫婦が普通に毎月行ける値段ではないんですね。オペラはもっとひどい状況だと思います。

芸術にはもちろん受益者負担は必要ですが、本当は、失業していたりお金がなかったりする人を励まし、もう一回社会参加をしていただく意味でも、そういう人たちに芸術が必要なのであって、市場原理にある程度は任せても、社会的弱者に対するフォローはまだ必要じゃないかと思います。

極端に言うと、オランダだと思いますが、ホームレスの方たちにコンサートに来ていただくというNPOの活動があります。ホームレスの方たちにシャワーを浴びてもらって、バザーで集めた服を着て、月に1回コンサートに招待する。ご承知のように、ホームレスの方たちは初めから貧乏だったわけではなくて、何かのきっかけで社会参加の道をあきらめてしまっているわけですね。そういう方たちに芸術に触れてもらうことによって、子どものときお母さんにコンサートに連れられて行ったなどが、芝居を見て感動したことがあったなということを経験してもらう。もう一度生きる希望なり生きがいを持ってもらうことが、実は社会の安定にとっても必要だし、仕事や住居だけを与えてもホームレスの人たちは社会参加はしてくれないですね。

それは極端な例ですが、やはり行政がやることですから、社会的弱者に芸術への参加の道をきちんと保障することは重要だと思います。外部監査は当然、お金の面で特に厳しく審査をされると思うのですが、この指摘をそのまま受け入れるにしても、社会的弱者に対する目配りは必要ではないかと思っております。

また、都民芸術フェスティバルについてですが、これは演劇・舞台芸術部門に関しては、申し訳ありませんが、これができた30数年前には意義があった活動かもしれませんが、厳しい言い方をすると、もう役割は終わってしまっているのではないかと考えております。外部からの指摘もありますが、期間も非常に長いですし場所もバラバラですし、フェスティバルである意義が全くない。外部への発信にもなっていないので、早急の是正が必要ではないかと思っております。

福原座長

どうもありがとうございました。いま包括外部監査指摘の料金の低廉さということ

についてのご批判がありました。今年の5月1日から3日まで行われたラ・フォル・ジュルネの最終的な報告を一度伺ってみたいと思います。

あれは、ほとんどのプログラムが1千5百円均一ですね。三日間にわたって、全く演奏会に行ったことのない人が50%ぐらいは来たという。あれはペイしたのかペイしないのか。食事などを含めた周辺に対する経済効果はどうだったのか。どの程度の補助だったのか。是非全体を知りたいですね。

平田委員

芸術文化に気軽に親しめる適正価格は、2千円程度ではないかと思えますし、ヨーロッパではストレートプレーは2千円から2千5百円ぐらいまでなので、そのぐらいにしていだけると気軽に見られるのではないかなと思います。

岡本委員

私は観光地づくりとかホテル経営が専門ですが、全般的な印象として、文化芸術の分野では、顧客満足度の因果関係、何が原因で顧客が喜ぶのかというあたりの理論があるのかなというのが気になりますね。

顧客満足ということを経営者は一生懸命考えるわけです。観光の場合ですと、たとえば観光地で、皆さんここに来てよかったですかと聞きますと、大抵の人はよかったと言う。しかし、また来てくれるかという来ない。顧客満足度が1から10までありますと、9とか10でないと来ないのです。顧客満足度5とか6と、9とか10の違いがどこで決まるのかというところの分析がないのかなと。民間企業の言葉で言えば、おそらく経験値や暗黙値はあるけれども、それが形式値としてマニュアル化され、一般化されていない。ですから、東京都の役割として、劇場マネジメントというような講座というか、劇場マネジメントのプロの養成ということが行政の役割かなと。本当は大学の役割なのですが。

アメリカに行きますと、私の分野のホテルマネジメントを教える4年制大学が100校近くあります。日本はゼロです。そこらがアメリカ系のホテルチェーンが世界を制覇する結果になってと思いますが、おそらく劇場経営という分野でも、アメリカの大学を見ますと、そういう学科が大学にたくさんあるんですね。それがいろんな文化芸術活動を支えているのだらうということを感じて持ちます。

もう一つは、お話を伺っていて、芸術文化の送り手の満足感の話なのか、それとも

受け手の満足感の話なのか、受け手の中でも、毎回来てくれる方に対する満足感の話なのか、全く初めて文化芸術に触れる人をふやしていけば大成功なのか、そこらの劇場マネージメントの評価の仕組みが未成熟ではないだろうか。評価の目的があって、その目的に照らして、今回のプログラムは大成功だったとか、大失敗だったというような評価の枠組みみたいなものをつくらないと、選択性に欠けると思います。

最後にもう一つだけ申しますと、私は多少ホテルのことがわかるんですが、ホテルというのは仲間仕事です。一人の人がお金を出して、いい建物を建てて、いい運営をするということはおそらくあり得ない。ですから、建てる専門の人が建てて、デザイン専門の人がデザインして、運営する人が顧客満足をねらって運営面で能力を発揮するという組み合わせでないと具合が悪い。

文化施策を評価する場合も、かかわる人がいっぱいいますから、どこの話をしているのかということ整理すべきだとの印象を持っています。

福原座長

大変重要な点のご指摘をいただきましてありがとうございました。

いまの9点か10点のスコアということは、そのお客さんにとって、ここでなければ私は来ないというような絶対価値の世界です。7点以下は相対価値で、比較したらもっと行きたいところがあるというそれだけの話であり、価値づくりということであれば、またマネージメントの話に戻るのかなと思いましたが、いかがでしょう。

柏木委員

先ほど、平田さんがホームレスプロジェクトのお話をされましたが、文化の部分から社会参加の気力をつけていくというのは大変重要なことだと思います。それは特殊な例かもしれないけれど、文化的な体験を通して、社会にもう一度参加していく力を得る機会としてできるだけ入場料価格はカジュアルにできればいいなと思います。

また、美術展や舞台・音楽にしても、それを取り巻く見えない体験がいっぱいあると思います。このところを少し刺激してあげる必要があるといつも思います。

例えば、きょうコンサートに行って、食事をどこでしょうかなとか、何着て行こうかなとか、帰りにDVDが欲しいなとか、いろんなプロセスを含めて、家に帰ってきてシャワーを浴びて寝るまでが一つの体験と考えるのであれば、そのストーリーを幾つか組み立てるような刺激があると思います。演劇を見に行くとなすごく楽しい、だけど、

帰ってきてそれを会話する楽しさとか、その他もろもろある気がします。そういうものを楽しめるガイドブックみたいなものになかなか行き当たらないですね。

僕はデザイン専門なので、レストランに行って食事を楽しむけど、スプーンがすごいとか、椅子がいいとか、いろいろ付帯する楽しみ方があって、それが広がっていくほどに文化の楽しみは深くなっていくと思います。

太下専門委員

外部監査の指摘についてのお話がありましたので若干意見を言わせていただきますと、料金の低廉さの重要度が低下という点について、おそらく二つの視点で考えたほうがいいのかと考えています。

一つは現時点で短期的に考えていく。もう一つは、将来的なことも含めて中長期的に考えていくということです。

短期的に考えますと、もちろん消費者側から見れば安ければ安いほうがいいというのは当然なわけですが、安くするために税金を投入することについていろいろな配慮が必要だろうと考えています。極端な話、安くしても見ない人は見ない。ですから、安くする政策を税金を投入してやる場合には、きっと合わせ技が必要です。安くした場合に都民がよりアクセスできることが別の政策で担保されていることが、税金を投入する前提条件になってくるのかなと考えています。

一方で、それとはまた別の論点として、最近、高額納税者が発表されましたが、すごい年収のサラリーマンがいますが、あの方も都民ですね。個人的には別に彼らに安くする必要はないなと思ったりもします。そう考えると、特に安くすべき対象は他にきっとあるのだと思います。先ほど平田さんからもお話がありましたが、たとえば失業されている方、こういう言い方は僭越なのかもしれませんが、いま失業されている方は非常に不幸ではありますが、逆に言うといろいろな文化をチャージできる時間がある。そういう方にアートに触れていただくのはきっと社会的にも意味があると思います。

また、学生にはいま以上に安くする必要があると思います。ヨーロッパのパフォーマンスは非常に料金格差がありまして、学生とか最低料金は非常に安いので、たぶん東京の問題は、単に高いという平板な問題ではなくて、最低料金が非常に高いところも大きな問題があると思います。

そういった意味では、先ほどの大友さんのお話にもつなげて言いますと、せっかく東京に来ている海外の留学生の方がいらっしゃるのですから、これらの方々への情報提供も含めて、もっと学生には安く、しっかり見ていただく形の機会提供はあってほしいと思っています。

いまの学生の話と若干ダブりますが、特に安く見ていただく意味があると思われるのはアーティストの方ですね。たとえば現代美術の作家がクラシック音楽のコンサートに行くとか、またはバイオリニストが演劇を観るとか、そういう交流はもっと必要なのですが、おそらく現状ではそういう交流は意外なほど少ないと思います。

いま料金を安くする場合の話をしました。中長期的に考えた場合、必要なのは自らの意思でもっとアートに触れたいと思う人を増やすことだと思います。これは非常に大変なことですし、時間も労力もかかることと思いますが、本来、政策として目指すのはここではないかと考えています。監査の中にもありますが、都民芸術フェスティバルを続けてきて効果が見えないような記述もありますが、おそらく最初に設定すべきだった目標はそういったことではなかったのかと思います。都民の中の自発的な鑑賞者を増やしていく。鑑賞者のパイがふえれば当然、個々のアーティストに回る資金の源も増えるわけですし、アーティストの自立もより早く、確実にできる期待も高まると思います。

そういった意味では、遠回りですが、感性のリテラシー、本当にアートを楽しめる人たちをいかに若いころからきちんと育てていくのが非常に大きな課題であり、本来、東京都の政策の持つべき目標なのではないかと感じました。

大友さんの貴重なお話をお聞きしていて、二つぐらい大きなポイントがあったと思っています。一つは、いま私も触れましたが、子どもたちに対してどういうふうにアートを提供していくのかということです。小さいうちから本物のものをとということで、大友さんもいろいろご活躍だと思いますが、ふと聞きながら考えていて、たとえば美術とか文学に比べてパフォーマンスはなかなか敷居が高いなと感じたんですね。

たとえば絵とか文章は大抵の人が自分でも書いたりする機会が非常に多い。特に社会人になると何らかの文章を書かなきゃいけない場面があって、自分で文章を書いてみると、文章を書くということは難しいな、三島由紀夫は美しい文章を書くなということに改めて感じると思います。しかし、パフォーマンスに関してはなかなか自

分で実際にやってみるといことがないために、演劇の持つパワーとかコンサートの持つパワーを間接的に感じるだけで、逆にそういったリテラシーがないと、そのすごさもわからないという壁ができています。そういった意味では、最近、ワークショップは非常に大はやりですが、自分も体を動かす側になると、プロフェッショナルのすごさがリアルに伝わるのかなと思ひまして、こういう活動を行政が側面から支援していくのが非常に重要ではないかと思ひました。

大友さんからお話しいただいた中で、国際的な文化の振興というか、国際的な中での日本の、または東京の位置づけをもっと考えていかなきゃいけないというお話があったかと思ひますが、非常に重要な課題じゃないかと思ひています。ユネスコがいま提唱している概念が「文化多様性」です。先ほど今村さんからもお話しありましたが、オーストラリアは文化多様性を、国の文化政策の非常に大きな柱に据えています。文化は多様なほうがいいと、言ってしまうと簡単なことで、誰しも、そうだよなと思うような話ですが、たとえば映像文化を見ると、実際われわれが接している機会が多いのはアメリカのハリウッド映画です。市場原理だけに任せておくと、多様性は自然には確保されないという問題も現代ではあるわけですから。そういった中で、いかに文化多様性を確保していくのが重要な概念になってくると思ひます。

おそらくそういった多様性が確保されれば、最近非常に大きな懸念事項である、たとえばテロリズムのような話も、また違う形でわれわれは対処できるようになると思ひていますので、そういう多様性を確保する上では、お互いの文化の違いを認識しなければならず、そのために個々のアーティストの文化交流がきっとあり得るだろうと思ひます。

単にアーティストが仲良くするためというのと、なかなか東京都の政策に位置づけられませんが、そういう交流を社会的な意義に還元していく作業がどこかで必要になると思ひますので、一つの概念として文化多様性ということも、東京ほどの大都市の場合には大事だと思ひます。

福原座長

ありがとうございました。では、私からも申し上げたいと思ひます。

さっき大友さんから、東京は音楽の大変なマーケットであるというお話がありましたが、半分冗談のような話で、クリーブランドシンフォニーオーケストラの理事会の話

を聞きました。彼らは1年に1回日本公演をやっているのが実績です。1年365日日本で公演をやっていれば大変な黒字になると。ところが、どうしても1年に1回はヨーロッパに行かないと楽団の質が上がらない。なぜかと言うと、日本でどんな演奏をしても手をたたく。ヨーロッパではちょっと怪しい演奏をするとアンコールも出ない。それで質を上げざるを得ない。ヨーロッパに行くと持ち出しになる。日本で儲けたものをヨーロッパで埋めているというのが彼らの内情だということを伺いました。

日本は呼び屋さんがたくさんあって、それが競争で、いろんな海外の有名なオーケストラを呼んで来るわけですが、その結果として今のようなことが起きているとすると、それはどういうことかなと思うわけです。

もう一つ、さっき包括外部監査指摘の中で、フェスティバルを一体化するというご指摘がありました。それは文化の多様性を担保することにはならないと思いますので、フェスティバルに参加する部分と、参加しない部分を明確に切り分けるべきじゃないかという気がします。先ほどお話があったように、この種のフェスティバルはその役目を終わったのではないか。そのへんは考える必要があるのではないかと思います。

大友さんのお話の中で、民間のホールの企画なり、あるいは競争力が大変ついてきたとありましたが、それなら東京都でホールを運営する必要はあるんだろうかという疑問が起きるわけです。むしろ民間でやっているものを東京都が支援したほうが早いのではないかという感じを受けました。

アウトリーチについていろいろお話がありました。私自身、11歳か12歳のときにレオナルドダヴィンチ展を見て、非常に影響を受けたことが生涯のきっかけになりました。そういったことを、たとえば包括外部監査等では見ていただけるのでしょうか。つまり20年後にならないと、あるいは、フランスの美術館連盟総局長のマダム・カシャは『私たちは50年後を見て仕事をしている』と言われましたが、50年はどうかと思うけど、少なくとも20年後は見なきゃいけない。そうすると単年度予算との関係は一体どうなのでしょう。

平田委員

私たちが考えなければいけないのは、僕自身は芸術とは人間の生活にとってなくてはならないものだと思っています。なければ死んでしまう。だとすれば、たとえば義務教育は基本的に全額行政が負担しますね。医療行為は受益者が3割負担です。では、

芸術にはどの程度の負担が適当なのかを考えるべきだと思います。

いまは全額負担が当たり前で、そのうちどれだけ助けてあげるかだけれど、その観点をちょっと変えるべきだと思っています。僕は芸術に関して言うと5割ぐらいがちょうどいいと思っています。6千円のお芝居でも3千円ですし、オペラでも安い席だったら4～5千円でも観られる。

岡本先生のお話しの人材育成についてですが、これはまさに劇場が人を育てるんですね。東京芸術劇場の問題は、東京芸術劇場が作品づくり、創作活動をしてこなかったためにプロデューサーが育たない。世田谷パブリックシアターも新国立劇場も、開館は1996年ですが、それから10年やって人が育ってきています。

その際に、福原さんがおっしゃられたように、もう劇場とか箱は要らないのではないかという考え方ももちろんあると思います。たとえば長崎県など、県立劇場を持っていない幾つかの県で、2～300の小さなホールをつくって、鑑賞活動などは長崎市と佐世保市に任せて、人材育成とか人材交流・国際交流に特化しようじゃないかというところも出てきています。ですから、そういう選択肢も十分あるのではないかと。

指定管理者制度で、東京都の芸術劇場は貸し館としてもなり立つわけですから、それはそれでいいと、そういう思い切った施策も選択肢としてあるのではないかと思います。すみません。これで失礼します。

(平田委員退室)

福原座長

芸術活動そのもの、あるいはそれを入れる箱、あるいはそれをマネージする人たち、あるいは観客、あるいは受益者負担等について非常に幅広いお話が出ました。大友さん、いままでの意見を聴いていて何か。

大友委員

先程の議論の補足ですが、民間のホールはビジネス的にうまくいっているとはとても言えない。新しくできた音楽ホールは、必死でがんばっていますが、経営は容易ではありません。私はやはり、東京文化会館がいろんな意味でリーダーシップをとって、ほかのホールをリードしていく責務があると思っています。ですから、安易に民間ということを考えるのは非常にリスクであると思います。

また、乱暴な意見で抽象的なのですが、文化がどれだけ大切かということは、文化庁

にしる東京都にしる、職員やその集団が、もう限界まで、これ以上できないという情熱やエネルギーを持って物事を動かせるかどうかにかかっていると思います。

パブリックは、周囲に気を配り、公平性とかバランスも大事だと思いますが、一方で、まちの誇りになるような、市民、国民の誇りになるようなものをつくり上げていくことも大事な使命ではないかと思います。

岡本委員

私、いま大学の教員を評価する委員会の座長をしていますが、いままでは大学の教師も年齢給で、給料に差がなかった。しかし、これからは大学のミッションに照らして、どのように貢献したかという貢献度を数値で表現して、ミッションに照らしてその人の貢献度合いを評価する仕組みが必要だとなるわけですが、同じようなことが文化施策についても言えると思います。ですから、一般的な物差しですと具合が悪いと思います。何か目的があって、その目的に照らして、このプロデューサーは本当にいい仕事をしてくれたとか、そういう評価軸を幾つか用意する必要があると思いました。

前回から、子どもや若い人に、次の文化の担い手としての役割を動機づけることの重要性が指摘されていますが、それに照らして、いい仕事だったかどうかを評価すべきだろうと思います。ですから、物差しは一色じゃないという感じがします。

福原座長

ありがとうございました。文化にかけるエネルギーと、そのほかのいろいろな事業にかけるエネルギーを相対的に比較するとどうなるかということですが、この間からいろいろ話題になっていますブルターニュのナントの場合には、今の市長が10数年かけて文化政策一本に絞ったわけです。

市のホームページで見ると、文化に関する予算が11%とか14%という資料もありますが、費目別には一番お金が出ているわけで、それは大道芸人とかラ・フォル・ジュルネとか、そういうものだけに使っているのではなくて、あらゆる政策に文化の筋が通っている。ルモンドの調査では、フランスの住み良いまちに2年間続けてランクされていますし、大きな枠としての文化政策を一体どうするのかという問題がやはりあるかと思うわけです。

いま、民間ホールの経営が決して楽ではないというお話がありました。全くその通りで、初めから赤字覚悟でやっているところもある。それはある意味ではボウモル・ボ

ウモンの古典的な研究で、再生産できない種類の演劇等については絶対にペイすることはないという調査がある。そういうことから考えると、むしろ親会社が援助している分に対して、たとえば国として税金を減免するとかというやり方もありますし、住民税でも同じことが考えられると思うわけです。

もう一つ、皆さん厳しい厳しいと言いますが、お金があって使いようがないという予算があればいい仕事ができるかということ、そうではない。その臨界点を承知で、リーダーが、今のスタッフたちをそれぞれ火の玉のようにして使命達成に取り組むかどうか、ここが非常に大事なところではないかと思うわけです。

柏木委員

海外のアーティストが、東京での演奏活動をキャリアとしていないという大友さんのお話は、音楽や舞台だけではなくて、美術・デザインに関しても全く同じです。東京のギャラリーでやるかニューヨークのギャラリーでやるかと言われたら、ニューヨークでやりますとすぐに言う状況があると思います。

それはもちろん送り手側の問題もあるでしょうが、受け手の問題もあると思います。とんでもない演奏をしたり作品を持ってきたら、こんなのだめだとはっきり言える受け手の批評性、つまり、リテラシーを持った受け手を育てる必要があると思います。

そうすると、生活の中に音楽やデザインがあり、自分に引き寄せる楽しみが生まれます。表現する人たちに予算をつける必要もあるでしょうが、楽しむ人たちにも予算をつけてあげたいと思います。

岡本委員

柏木先生のお話とも重なりますが、日本のアーティストが日本で評価されるために、行政の役割として、たとえば東京が国際的なコンテストをやり、審査員は外国から招き、日本人のアーティストにも勝負してもらおう。

観光の分野では、アニメのコンテストがずいぶん国際的になりました。そういった国際的なコンテストをやるのが、行政の役割としてあるのかなと思いました。

大友委員

日本にはコンクールが数多くありますが、大きい国際コンクールは、残念ながら東京にはありません。検討していただければうれしいと思います。

福原座長

柏木委員がおっしゃった中で、受容者のすそ野のリテラシーを上げるとありましたが、このことは包括外部監査に反映されていないことを指摘しておきたいと思います。

もう一つは、横浜市での横浜トリエンナーレが、かなりうまくいっていると聞いています。市が先導するだけでなく、ボランティア活動などを含めて、順調に進んでいるとい聞いております。

したがって、コンテンポラリーアートの世界で、東京でビエンナーレなりトリエンナーレを繰り広げることは不可能ではないと思います。しかしその前に、その政策はどうあるべきかを決めてから、それにかかるのが筋ではないかと思ひまして、1年間ご議論をいただきたいと思うわけです。

今村委員

本当にごもつともだと思ひます。我々のミッションは一体何なのかを、この会の中で議論をして、明快にしていきたいと思ひます。

ご存知のように、指定管理者制度の問題もありますので、具体的な公共のビジョンなりミッションを実現化させ、それをブレークダウンし、どういうプロジェクトが一番ふさわしいのかという議論をしなければならない。

もう一つ、コンクールとか、ビエンナーレあるいは都民芸術フェスティバルなどもありましたが、たとえば美術館やホールを中心とする事業と、助成制度、それも団体助成、事業助成といった制度をどのように整備していくのか。それと同時に、国際的なパブリシティのインパクトもあり、かつ統合性のある、たとえば東京フェスティバルのようなものが必要なのかも、かなり重要な観点ではないかと思ひます。

先ほど申し上げましたが、オーストラリアでは、メルボルンフェスティバル、クィーンズランドミュージックフェスティバル、シドニーのビエンナーレなど、各都市・各州が、各フェスティバルを持っています。そして、必ず世界中のディレクターを呼んでいる。ということは、結果的にはそれが見本市になっており、そのディレクターが次にリバプールでやり、エジンバラでやるという相乗効果を持っています。

フェスティバルディレクターたちと会ってきましたが、みんな私に、何で東京にはフェスティバルがないのかと質問をしてきました。都のビジョンやミッションと、各館の持つミッション、それと同時にインフラの整備かつ、官と民の間にあるフェスティバルの必要性を、もう一度議論をさせていただきたいと思ひます。

山内生活文化局長

都民芸術フェスティバルは、都民に低廉な価格で質の高い文化芸術を提供する目的でございます。包括外部監査では、1億余の補助について、その効果がよく見えないとの指摘です。社会状況の変化を前提に考えた場合、低廉な価格で提供するだけが目的ではないのではないかという問題提起です。この語る会の中で、単年度ごとにやっている包括外部監査の評価手法などに対し、反論や考え方が提案できればと思っています。

また、大友委員に、交響楽団のフランチャイズについてお聞きします。すみだトリフォニーと新日本フィルとか、東京交響楽団とミュージア川崎など、フランチャイズについて、文化会館の音楽監督という立場から見てどのようにお考えでしょうか。

大友委員

フランチャイズは、現場にとって非常に意義深いことだと思います。純粹にいい音楽を提供するという立場では、非常に意義は大きいと思いますし、ホールとフランチャイズをしているオーケストラが増えてまいりました。

文化会館の場合は、ご承知のように都響が本拠地を置いておりますが、私の個人的な意見では、都響と文化会館あるいは芸術劇場がある程度密接なつながりを持つのが自然な形ではないかと思えます。文化会館も芸術劇場も、仮に都響のフランチャイズになりましても、従来どおりの貸しホールあるいは自主公演をする開館としての機能は全く失われることはないと思えます。

都民芸術フェスティバルのことで一言だけ申し上げれば、オーケストラのコンサートに関しては、東京のオーケストラが横並びで低廉な料金で、N響から東京交響楽団までが同じ時期に演奏会を提供する機会は、都民芸術フェスティバルを置いて都内には他にありません。大変楽しみにしているお客様も多いし、私もよく参加させていただいていますが、横並びになっていることの刺激や競争という意味で、非常に貴重な機会だと思います。

福原座長

今日は貴重な意見をいただいた。これをもう何回か重ねて、まとめになると思えます。

また、外部監査の指摘では、たとえば、ラ・フォル・ジュルネによる社会の変化もあるわけで、そういうものの評価を毎年毎年するのは非常に困難なのではないか。大事

なのは、芸術文化の本質とは人間にとって何なのか、あるいは生活にとって何なのか、あるいは東京都がどのような役目を果たすのか、といったことを本質的に考えていき、最後の結論の中に入れ込むべきだと考えています。

それではこれで閉会させていただきます。ありがとうございました。